

子供の自立と親の自立 — 家庭に於ける父親の立場を中心に —

熊本県PTA連合会会長
熊本大学文学部日本語学研究室
教授 伊原信一



■ 略歴

北海道大理学部化学学科卒
北海道大学大学院文学部研究科博士課程中退
北海道大学文学部助手
熊本大学文学部講師
熊本大学文学部助教授
熊本大学文学部教授（専門 日本語史）

■ 現在

熊本県PTA連合会長

今時の父親は子育てに無関心で、果たすべき役割を果たしていないという。確かにPTA活動に父親が参加することは希である。しかしだからといって一昔前の父親に比べて私たちが無関心であることを意味しない。いくつかの学校において父親の会が結成されていることからわかるように、むしろ昔に比べれば遥かに父親の参加は増えているのである。ただし「お父さんをPTAに」というかけ声の背後には、「いざという時にはお父さんでなければ」という発想が潜んでいるように思う。時として男でなければという場面の有ることを私は否定しない。しかし子育てにおいて同じ事が言えるかどうか実は疑問に思っているのである。

確かに戦前のお父さんはいざという時のお父さんであった。その名残の濃かった昭和30年代、私はめったに父と口を利かなかった。それほど父は恐れ多い存在であった。多くの家庭で父親は一家の支配者であり、母親の背後には常に父親がいた。つまり母は父の了解を得た上で私たちに接していたのである。したがって父は必ずしも私たちに直接話す必要がなかった。

ところが今のお母さんは必ずしもお父さんの同意を必要としない。お父さんは支配者ではなくお母さんのパートナーなのである。お父さんとお母さんが対等であるように、兄弟も原則として対等であって、長男が特別扱いされることもない。そういう家庭でいざという時のお父さんなんてものが、腕力以外に本当にあるだろうかと思うのである。お母さんに対して絶対的権力者であったお父さんだからこそ、直接子どもたちの前に乗り出してきた時それなりの権威を持ち得たのである。

私は決して現代の家庭のあり方を批判しようとしているのではない。現代には現代のお父さんのあり方があって、「一家にひとり頑固親父を」というような復古主義では問題が解決しないと思うばかりである。そしてこういう現代社会だからお父さんの自立が望まれるのであり、そのためにはお父さんの子育てはどうあるべきか、またお父さんは校区の一員としてどういう役割を果たすべきか問い直す必要があると思うのである。お父さんの自立が無い限り子供の自立もあり得ないことは言うまでもない。